

〈高校生の部 佳作〉

ここには、なにもない

東京大学教育学部附属中等教育学校 吉住 恒思

坂道を登りながら、ひと息いれた。

ふっと振りむくと、向こうには、干潟が見える。朝に溜めこんだ光を発散するかのように、干潟の砂浜はサラサラと輝いていた。

後ろからついてくる父の息は、もう完全に上がっていた。

小高い山の上には、神社がある。とり立てて大きい神社ではない。掃除がよくゆき届いた、雰囲気の良い場所だ。

でも、今日の目的は、この神社ではない。

さらにその奥――寂しげな階段を登ると、朽ちた鉄柵に囲まれた記念碑が見える。そこに刻まれた文字には、

『古来 平和の為の戦いと呼号し 幾多の民衆の血を流した戦争の歴史は』
と書いてある。だけど、それ以上先は、剥げかかって読むことができない。

諦めて、スマホで写真を撮ると、また神社に引き返した。神社でお参りをしたあと、売店でソフトクリームを買った。

近くにあるベンチに、父とふたりで座る。青いプラスチックのベンチで、白抜きの広告は擦れて、粉を吹いていた。

「宿題は終わったのか？」

父がきいた。

「うーん……」

僕は、声にならない唸り声をあげた。学校の宿題は、第二次世界大戦に関して調査するものだ。だけど、この石碑だけではインパクトが少ない。このままレポートを提出しても、真ん中くらいの評価が関の山だろう。

僕は、父にきいた。

「第二次世界大戦のこと、なんか知ってる？」

「知ってるわけないだろ。俺の親父も、生まれたのは戦後だしな」

「だよねえ……」僕は落胆する。

「だけど、俺も昔、同じような宿題を出されて、お前と同じくらいの歳に、爺様に話を聞いたことがある」

爺様——つまり僕の曾祖父だ。
ひいおじいさん

「戦争のこと？」

「そうだよ。爺様は、満州に出征してたからな」

「で？」僕は先を促した。

「爺様は、めずらしく神妙な表情で黙ってた。なにかに耐えるようにぐつと拳を握り締めて、体が震えていた。そうして、ようやく渋々口を開くと、言っただ。」

『——語ることなんか、なんもなか』

「なに、それ？」

拍子抜けした。

「俺だって、そう思ったよ。インタビューはそれで打ちきりになった。爺様の眼には涙が浮かんでた」父はぐつと四肢を前に伸ばすと、続けた。「爺様は満州の引き揚げで、言葉にできないような地獄を見てきたんだ」

「地獄？」

「言葉って、頼りないものだよな」

「それでも、戦争は語り継がなければならないんじゃないの？ あの石碑みたいに」

僕が山の頂上を指でさすと、父は深く、そして細く息を吐くと、不機嫌そうに言った。

「あの頃だって、みんな、強い人間だったばかりじゃなかったんだ。」

——もう、帰るぞ」

気がつくのと、溶けかかったアイスクリームで、僕の手はベトベトになっていた。

山を下りて、すぐそこが、僕の曾祖父が住んでいた実家があった場所だ。今はもう平置き
の月極駐車場になっていて、跡形もない。

父は子供っぽく、そこら辺に生えてあったススキを引き抜くと、ふり回しながら言った。

「俺は、爺様の店で、お客さんがいない時に、本を読むのが好きだったんだ」

曾祖父は、美容師だった。実家は、土間を通じて店舗とつながっていたらしい。その十畳
一間に、六人家族が肩を寄せあって暮らしていた。

父は目を細めると、言った。

「爺様は、美容師の仕事に誇りを持ってた。家族もいて、幸せだった。平凡だけど、守るも
のがここにたくさんあったんだ。」

だから、戦争の話なんかしたくても、俺にはできなかったんだらう……」

僕は、あらためてきいた。

「それで、良かったの？」

父はススキを放り投げると、力強く言った。

「それが、良かったんだよ。爺様は、好きで戦争に行ったわけじゃない。言葉にできないほど
ど酷い過去を忘れて、幸せになる権利は誰にだってあるだろ？」

目を閉じると、白桃のような十月の秋の香りがした。

ここには、なにもない。曾祖父の実家も、残した言葉も――だけど、父と僕がいる。幸せな僕たちがいる。

それで、僕の宿題はもう十分だった。